

## 千葉では珍しいコツブタケ

吹春 俊光

コツブタケ (*Pisolithus tinctorius* [広義]、ニセショウロ科、担子菌類) は、広く世界中に見られるマツ属との共生菌で、外生菌根の代表的な種として、かつては外生菌根の共生実験などで広く用いられてきました。関西ではマツが生えていれば必ず見られる普通種なのですが、千葉では希なきのこで、1987年から房総で菌類調査を行っている県立中央博物館の記録には、2012年10月6日に房総のむらの観察会での目撃情報があるのみでした(吹春ほか 2022)。

そして2021年9月26日、NPO法人リトカル主催による千葉県立幕張海浜公園での観察会で採集され、それが博物館の初標本 (FB-45406 [CBM]) となりました(写真)。房総半島ではほとんど採集されないのに、埋め立て植栽地の幕張、そして、マツを植栽している房総のむらの、たった2例しか記録がないということ。それが意味するのは、おそらくこの2例



の記録は、植栽にともなう県外からの移入種として発生したと考えてよいのではないのでしょうか。世界中での普通種なのに、千葉では何故まれなきのこなのか。房総にマツタケがみられない謎と同様の、房総きのこミステリーです。

**【文献】** 吹春俊光・腰野文男・大野将史・佐野悦三・P. T. Nguyen・N. H. Nguyen・清水公徳 (2022) 県立房総のむらの大型菌類相. 千葉中央博研究報告 16: 23-47.

□

### 【図書紹介】 世界の発光生物 — 分類・生態・発光メカニズム

著者: 大場裕一, 名古屋大学出版会, 2022年2月28日発行, 5400円(+税), ISBN-10: 4815810575, ISBN-13: 978-4815810573

豊富な注と引用文献、そして地球の全ての生物に配慮した発光生物の本です。発光生物の定義を「人間が観察できる強さの可視光領域の光をみずから発する(中略)生物種」と述べておられますが、菌類では機械ではかるとおびただしい菌種の発光が知られているようで(広井勝先生私信)、そこまで対象にすると、きっとあまりに膨大になりすぎる故の限定かもしれません。全433頁のうち菌類は8頁。シノトモシビタケのコラムもあります。シノトモシビタケといえば、根田先生がEJHコーナー先生のタイプ標本を見に行く話が会報にもありました。著者は50歳そこそこで、あとがきに「書き進めるほどに自分の中に新しい研究のアイデアが浮かんでくる。あと20年程の職場の現役人生をのこして書き上げほんとうによかった」という意味のことを述べておられます。ちょっと高価なので近くの図書館にリクエストしてみてください。

**【参考】** 根田仁 (2009) 「エジンバラ植物園で Corner 博士の標本を見てきました」千葉菌類談話会通信 25: 8-11. (光)

